

## 編集中心

経済学者中谷巖は今日の新聞（読売）で「資本主義の本質は（投機）である」と述べている。昨秋以来の世界経済の激変は、お金を増やす行き過ぎた金融技術の当然の破綻に端を発した。そこから生じている現在の恐慌はいつ、どのような形で収束するのだろうか。こうした事態は百年に一度と言われているが、今度は少なくとも五百年に一度の価値観の大変革を伴うのではないかというのが筆者の予感である。

私はちょうど五十年前、秋田の山奥から東京に出た。思えば物心ついてから十八歳までの生存の基調は貨幣経済的なものではなく、物々交換的感覚に満ちたものであった。物々交換を基調とした生活リズムは、私の生まれた村では、中央

の弥生時代からの大きな時代区分毎の価値変貌の影響をあまりうけないまま、縄文時代からそのまま続いてきたものではないかと思う。

生きるのに必要なモノにじかに接することが可能だった辺境秋田時代と違い、大都會の生活においては実体の記号化を通して財に接近するのである。こうしたヴァーチャル化に慣れると、具体物に対する身体感覚が薄れてくる。空気が、土、水、光、火、熱、匂い、音、声などに対する感覚が衰える結果、例えば環境問題は言語化して自己から離脱させ、客観化してみないと対処できなくなる。しかし身体から切り離されたこうした頭では、ソマリア沖の「海賊」（古代では貴族扱いされた）と環境問題とは結びつくことなく、海賊発生の原因は理解できないまま、ひたすら軍事力で「無法な海賊」の消滅をはかることになる。具体感覚を軽蔑し、抽象化能力のみを価値あるものと考ええる人間はバカである。大きな戦いもなく、三内丸山文明を千五百年間維持さ

せた縄文時代の人間は現代人よりはるかに賢い。彼らの社会には、現代社会に必要な不可欠な記号とされる貨幣が存在しなかった。

ホメーロスの作品は、今から三千年以上まえの古代社会を歌ったものだが、描かれたこの社会には貨幣使用の跡がない。貨幣が実際になかったとは考えられないが、作品のなかのこうした貨幣の不在から、当時の歌い手が貨幣という経済記号をどのように考えていたかを伺い知ることができる。

欧米の言語文化の根源に位置している古典研究がおろそかにされはじめて久しい。現代人の価値観が変わり、大昔の人間の世界観が理解できなくなってしまう。古典語はおろか中世語に無知でも西洋思想・文学・言語の専門家であると称している。金銭・職業にはほとんど結びつかない古い言語を知らなくてもこの現代では専門業が立派に成り立つからだ。しかし古典など翻訳で読めば足りる、

という考えは大きな間違いである。数学や物理化学と違い、文学作品はその言語の世界観そのものと固く結びついている。方程式の解法は、それぞれ違った言語で説明されても同じ解にたどり着くが、そうはいかないところに文学作品の作品としての意味がある。各言語には固有のものが見方があり、それが作品の価値・意味と密着している。ホメーロスの作品はホメーロスの言語で解説し、詩(うた)は歌ってみなくてはならない。

経済問題から始まった昨今の社会の激動は、忘れ去った価値観を現代人が取り戻さないかぎり、この社会は釣り合いのとれた状態に立ち戻ることができないことを意味しているのではないか。われわれ人類が過去に保持し、いま見失ってしまった人間性を取り戻すためにこの大変動はまたとない好機なのだ。

09 2/11

\* 今回の『言語文化』二十六号の特集テーマは「ヨーロッパ古代とフランス文

学」。学問は〈投機〉であってはならない。執筆者の生田康夫氏は元日本航空社員、俳人、フランス語、ギリシャ語に堪能で二〇〇五年、横浜・春風社から『イリアス日記』を出し、二〇〇八年度から、われわれの「ホメーロス輪読会」に参加されている。宇波彰氏は本学元文学部長、現在は名誉教授。京都大学大学院出身の今村純子氏は現在慶応義塾大学講師。天沢退二郎氏は本学名誉教授。杉本圭子氏は本学フランス文学科準教授。専門はスタンダール。それに私である。

\* フランスから寄稿して下さったクレマン・レヴィ氏は古典文学の若いアグレジェ。現在サン・テチエンヌ大学で比較文学担当の専任講師。ジャン・ピエール・ルヴェ氏はクレマン・レヴィ氏の師で、文法のアグレジェ。フランス古典語教育学会前会長。リモージュ大学教授にして明治学院大学名誉博士である。

(工藤進)

\* 二〇〇八年度の言語文化研究所では、いくつかの興味深い催しごとが、招待研究講座と公開講座という形をとって行われた。以下に簡単に記しておきたい。

\* 五月二十四日は「女性・詩・翻訳」という表題のもとに、ニューヨーク在住の佐藤絃明氏をお招きして、講演と朗読の会が行われた。佐藤氏は『万葉集』から宮沢賢治、高村光太郎、また吉岡實や吉増剛造まで、日本の詩を三十年以上の長きにわたって英語に翻訳されてきた文学者である。氏が彼の地で『日本女性詩』という大部のアンソロジーを編纂翻訳されたことを記念して、原詩を提供した阿部日奈子、財部鳥子、新川和江の三氏が日本語で自作を朗読し、佐藤訳を横浜国立大学留学生のリジー・リー氏が朗読した。本誌に掲載されているのはこの際に佐藤氏が行った講演をもとに、氏が改めて書き下ろされた論考である。『言語文化』では二〇〇五年の二十二号で翻訳の問題を特集しており、その系譜に通じる探求としてこの企画をご理解していただ

きたいと思う。

\*二〇〇八年度は演劇をめぐる公演、ワークショップ、講演が相次いだ。研究所員である岡本章（文学部芸術学科教授）が演出する『月光の遠近法』（練肉工房公演、高柳誠作）が、七月五日に上演された。またその四日後の七月九日には、人形劇団である結城座による宮沢賢治原作『注文の多い料理店』（山元清多作）が上演された。いずれもが白金キャンパス奥にあるアートホールの本格的な改装が実現した結果である。言語文化の探求とは単に外国の珍しい書物を読むことだけではなく、白日のもとにパロールを曝け出し、言葉に身体を回復させることでもある。今後もこうした演劇的言語をめぐる企ては、研究所として続けていきたいと考えている。

\*哲学と都市論、映像をめぐるつても、ユニークな講演会が催されたことを報告しておきたい。六月十八日にはニューヨークで批評的著述活動をされている高祖岩

三郎氏による「アートとアクティビズムの交差領域」という講演がなされた。本誌に収録されている高祖氏の論考は、それをもとに執筆されたものである。また六月二十五日にはフランス国立科学研究センター研究ディレクターである今枝由郎氏による「星の王子さまとダライ・ラマ十四世——ユマニストの系譜」という講演がなされた。最後に十二月二十二日には、フィルム『蛇イチゴ』『揺れる』で名高い映画監督西川美和氏による作品上映会と講演が行われ、多数の観客の参加を得た。

\*最後にこうした催しごとにはよらない特別の寄稿について説明しておきたい。本学名誉教授である宇波彰氏は二〇〇七年度より当研究所で、ベンヤミンからラカンにいたる現代思想のアポリアをめぐるゼミを開催し、この「宇波ゼミ」は研究職にある者や芸術家を含め、学内外から少なからぬ参加者を集めてきた。今回この論文はこのゼミにおける氏の理論的探

求に基づくものである。また富山英俊氏（文学部英文学科教授）の宮沢賢治をめぐる論考は、先に氏が発表された一連の詩論の延長上にある新しい展開として貴重なものである。ここでお断りしておきたいのは、所長のわたしこと四方田犬彦が、本号に何も書いていないことだろう。これは研究所の近年の活動をめぐる認証評価の書類を執筆するため、ひと夏を官僚的言語に忙殺されたという事情によるものであり、読者諸氏には寛容あるご理解をいただきたいと思う。

\*最後にひとこと。本号の特集を編集なされたフランス文学科の工藤進教授が、二〇〇九年三月をもって退官される。氏が長きにわたって言語学者として本研究所のためになされた貢献を思うとき、所員一同は深い感謝の気持ちを抱かずにはおられない。

（四方田犬彦）

















